

令和6年度生徒指導サポート実践校「特別活動の取組事例」

学校名	広島県立福山葦陽高等学校	校長	前田 節子	生徒指導主事	平石 健太
取組事例名	『生徒主体の体育祭』				

1 取組の設定	
取組を実施する意図及びねらい	取組を通して育てたい児童生徒像
<p>体育祭において、昨年度までは、主に教員が選手の招集や競技の審判を行っていたが、運動部活動・生徒会執行部の生徒を中心としての運営にソフトチェンジをした。生徒の自己肯定感の醸成や成功体験を通して人間関係形成をねらいとした。</p>	<p>生徒が主体となって運営、競技することで、「自分たちが主役である」という意識を持ち、行事だけでなく、様々な活動に対して主体的に取り組む姿勢を身に付けさせる。仲間と、達成感や喜びなどの感情を共有することで、他者への配慮や共感力を身に付けさせたい。</p>



2 展開	
取組の具体的内容	取組の創意工夫
<p>○8～9月に生徒会執行部と種目の検討を行った。 ○9月には運動部部長会を開催し、競技運営上、特に大変な「招集係」「誘導係」「競技審判係」「用器具係」の打ち合わせを行った。 ○10月には、「放送係」「記録得点係」とも連携し、予行練習までに係ごとで打ち合わせをしておくよう連絡した。 ○10月29日（火）5・6限（2時間） 非常に短い時間ではあったが、生徒のスムーズな動きのおかげで、競技における招集からの流れを全て確認できた。 ○10月31日（木）体育祭当日 予行練習を経験しての1日であったので、生徒一人ひとりが自己の役割を把握し、主体的に動くことができた。お互いに応援したり、他学年や他チームを応援したりと、日常ではあまり見られない姿がよく見えた。 閉会式後の集合や片付けまで生徒が主体的に行動し、スムーズに終えることができた。</p>	<p>生徒にめあてをもたせるために ○競技や運営における役割分担を、運動部活動ごとに生徒に決めさせた。 ○部活動部長会などを通して、「自分たちに任せられている」という自覚をもたせる話をした。 ○予行練習やホームルームなどで、「生徒が主役」というフレーズを意識して使用した。</p> <p>生徒の意欲を高めるために ○教員が大まかな方向性を示し、その中で生徒の意見を尊重して実施した。 ○予行練習に至るまでの練習では、主にできていることに言及するようにした。</p> <p>生徒の頑張りを認め、価値を付けるために ○全体に話をするとき、生徒の活動を褒めるようにし、各色の団長や3年生の姿勢を見本にするよう声をかけた。</p>



3 成果と課題
<p>○教員の中には、生徒に任せることに不安があるという意見もあったが、実際にはきちんとできた。 ○他者に共感したり、応援したりすることは、日常生活でも声をかければできそうなことであった。 ○生徒それぞれが役割をきちんと与えられれば責任をもって取り組むことができた。 ●日常生活でも、教員が生徒に「任せてみる」ということが必要である。 ●「生徒に任せる」ことが丸投げにならないよう、きちんと指導したことを「生徒に任せる」ことができれば、生徒の自己肯定感が高まっていくと考えられる。</p>